

韓国語を母語とする日本語学習者の 結果状態場面における「-タ」形と 「-テイル」形の選択傾向

—日本語の「-テイル」形と韓国語の「-e iss-ta」形の
使用基準の違いに着目して

李 在鉉

✦要旨

本 研究は、母語の影響という観点から日本語と韓国語の結果状態形の使用基準の違いに着目し、(i) 両言語の母語話者と韓国人日本語学習者の「-テイル」形の選択傾向の違いと、(ii) 韓国人日本語学習者は、どのような場面に「-タ」形を使用する誤用が生じやすいのかについて検討した。日本語母語話者56名と韓国語母語話者60名、韓国人日本語学習者84名を対象に調査を行った結果、(i) 韓国語母語話者と韓国人日本語学習者は、日本語母語話者とは違って、結果状態を言う際に「話し手の認識と外部世界とのずれの感じやすさ」の違いにより、それぞれ結果状態形の選択を変えることがわかった。また、(ii) 韓国人日本語学習者は、レベルにかかわらず、初めて見た結果状態を言う場面に「-タ」形の選択が多く見られた。

✦キーワード

韓国人学習者、結果状態場面、母語の影響、
テイル形、タ形

✦ABSTRACT

The purpose of this paper is to investigate (i) the difference in the selection tendency of resultative state form between the native speakers of both language and Korean learners of Japanese and (ii) the situations in which Korean learners of Japanese are most likely to mistake the usage of *-ta* form, focusing on the difference in usage of resultative state form between Japanese and Korean from the viewpoint of L1 transfer. As a result of survey of 56 Japanese native speakers, 60 Korean native speakers and 84 Korean learners of Japanese, following conclusions have been drawn: (i) the native speakers of Korean and Korean learners of Japanese change the selection of resultative state form in referring to resultative state depending on "the ease of recognition of the discrepancy between the assumption of the speaker and outer world". Further, (ii) The Korean learners of Japanese tend to select *-ta* form in cases where they have just seen the resultative state.

✦KEY WORDS

Korean learner of Japanese, resultative state,
L1 transfer, *-teiru* form, *-ta* form

Tendencies in Selection of *-ta* form and
-teiru form by Korean Learners of
Japanese in Resultative State
Focusing on the Difference in Usage
between Japanese *-teiru* form and Korean *-e iss-ta* form

JAEHYEON YI

1 はじめに

韓国語を母語とする日本語学習者（以下、「韓国人日本語学習者」と呼ぶ）には、結果状態を言うとき、(1a)のように「-テイル」形を使用するべきところに「-タ」形を使用する誤用が見られる^[註1]。

- (1) (一緒に食事をしている友達の頬にご飯粒が付いている。それを見て、友達に)
- a. 韓国人日本語学習者：ほっぺたに、なにか付いたよ。
(N1、学習歴：10年9ヶ月、滞在歴：1年4ヶ月)
- b. 日本語：ほっぺたに、なにか{#付いたよ/付いてるよ}。
- c. 韓国語：pol-ey mwe {mwut-ess-e / #mwut-e iss-e}。
ほっぺたに なに 付く-過去-語尾/付く-結果状態-語尾

(1)のような場面は、友達の頬にご飯粒が付くという変化を目撃したわけではなく、頬にご飯粒が付いた後の結果状態を見ているため、日本語では結果状態を表す「-テイル」形が自然である((1b))が、韓国語では「-ess-ta」形(日本語の「-タ」形に該当する)の使用が自然である((1c))。

小野里・イ(2008)と孫(2012)は、韓国人日本語学習者がどのような結果状態場面において(1a)のような誤用を生みやすいかを明らかにするため、日本語を専攻している大学2年生から4年生を対象とし、アンケート調査を行っている。その結果、韓国語では過去形が自然な場面(たとえば(1c))において、日本語の「-タ」形を選択する傾向がある(たとえば(1a))ことから、韓国人日本語学習者は母語の影響により韓国語で過去形が自然な結果状態場面に「-タ」形を使用する誤用が生じやすいと結論づけている。しかし、どのような結果状態場面に、日本語では結果状態形が自然で、韓国語では過去形が自然であるのかについては説明されていない。つまり、韓国人日本語学習者がどのような結果状態場面において「-タ」形を使用する誤用を生みやすいかについては、まだ不明確なところが多い。

韓国における日本語教育の現場では日本語の結果状態を表す「-テイル」形

は韓国語の「-e iss-ta」形に該当すると教えられていることから、本稿では、結果状態場面における日本語の「-テイル」形と韓国語の「-e iss-ta」形の使用基準の違いに着目し、両言語の母語話者との比較を通じて、韓国人日本語学習者はどのような結果状態場面に「-タ」形を使用する誤用が生じやすいのかについて考察する。

2 結果状態場面における日韓の結果状態形の使用基準

結果状態を言う場面において、日本語では「経緯全体を直接知覚したとき、あるいは直接知覚したのと同程度に経緯全体を把握できたとき」に限り過去形「-タ」が使用され、「経緯全体を完全に把握できないとき」には結果状態形「-テイル」が使用される(生越1997,井上ほか2002)。つまり日本語では、結果状態を言う場面において過去形「-タ」を使用するためには、「経緯全体を把握している」といった特定の条件が必要である。一方、韓国語では、結果状態を言う場面において基本的に過去形「-ess-ta」が使用され、結果状態形「-e iss-ta」を使用するには「話し手の認識と外部世界(眼前状態あるいは聞き手の認識)とのずれがある」といった特定の条件が必要である(李2017)。

- (2) (聞き手のハンカチが落ちたのを見て、その直後に)
- ハンカチが a. {落ちましたよ/?落ちてますよ}。
b. {ttelecy-ess-eyo / ?ttelecy-e iss-eoyo}。
落ちる-過去-語尾/落ちる-結果状態-語尾
- (3) (靴下を履こうとしたら、穴があいている)
- 穴 a. {?あいた/あいてる}。
b. {na-(a)ss-ney / ?na-(a) iss-ney}。
あく-過去-語尾/あく-結果状態-語尾
- (4) (チヂミを食べたことのない友達同士が、韓国に遊びに来て、初めてチヂミを食べていたら、一人がチヂミに唐辛子が入っているのを見つけた。それを辛いものが苦手な友達に言う)
- 唐辛子が a. {?入ったよ/入ってるよ}。

b. { tuleka-(a)ss-e / ? tuleka-(a) iss-eo }.

入る-過去形-語尾 / 入る-結果状態形-語尾

(3') (さっきコンビニで買った靴下を履こうとしたら、穴があいている)

穴 a. { ? あいた / あいてる }。

b. { na-(a)ss-ney / na-(a) iss-ney }.

あく-過去形-語尾あく-結果状態形-語尾

(4') (辛いものが苦手な日本人の友達が初めて韓国に来て、食堂でチヂミを頼もうとして
いる。友達は、日本でしかチヂミを食べたことがないため、韓国のチヂミには唐辛子
が入っていて辛いのがわからないようだ。その友達に)

韓国のチヂミは唐辛子が

a. { ? 入ったよ / 入ってるよ }。

b. { tuleka-(a)ss-e / tuleka-(a) iss-eo }.

入る-過去形-語尾 / 入る-結果状態形-語尾

(李2017の(17)・(13)・(14)・(13')・(14')改変)

日本語では、(2)のように変化を目撃している場面では「-タ」形の使用が自然である。一方、(3)～(4')のように、話し手が変化(「穴があく」(3)(3')、
「チヂミに唐辛子が入る」(4)(4'))に気がついたときには既にそうになっていた場
面では、結果状態を表す「-テイル」形の使用が自然である。

それに対して、韓国語では、李(2017)によると、(2)～(4')のように結
果状態を言う場合、基本的に「-ess-ta」形(日本語の「-タ形」に該当する)の使用
が自然であり、韓国語の結果状態を表す「-e iss-ta」形は、(3')のように「さ
っきコンビニで買った靴下なのに、穴があいている」といった話し手の認識と
眼前状態とのずれがある場面や、(4')のような「チヂミは辛い食べ物だと思っ
ている友達と、実は本場のチヂミは辛い食べ物だと言う話し手」といっ
た話し手の認識と聞き手の認識とのずれがある場面に関り自然になる^[註2]。つ
まり、結果状態場面において、韓国語の「-ess-ta」形は、「話し手の認識と外部
世界とのずれ」があってもなくても使用できるが、韓国語の「-e iss-ta」形は、
「話し手の認識と外部世界とのずれ」があるときに限り使用できると言う。こ
のことから、李(2017)は、日本語の結果状態を表す「-テイル」は、話し手の

認識と外部世界とのずれがあるかどうかにかかわらず、変化の瞬間あるいは変
化の前後の状態を把握していないときに使用するのに対して、韓国語の結果状
態を表す「-e iss-ta」は、話し手の認識と外部世界とのずれがあるときに使用す
ると結論づけている。

本稿では、それを検証すべく、アンケート調査を用い、韓国人日本語学習者
の日本語の「-タ」形と「-テイル」形の選択には「話し手の認識と外部世界と
のずれの有無」によって、どのような違いがあるのかを探る。

3 調査

3.1 調査の概要

調査の目的は、「話し手の認識と外部世界とのずれ」の感じやすさの異なる
文脈で、過去形(「-ess-ta」「-タ」)と結果状態形(「-e iss-ta」「-テイル」)の選択が
変わるか否かを見ることで、(i)日韓両言語の母語話者と韓国人日本語学習者の
選択傾向の違いと、(ii)韓国人日本語学習者は、どのような場面に「-タ」形
を使用する誤用が生じやすいのかを明らかにすることである。調査参加者は、
日本語母語話者(JNS)56名と韓国語母語話者(KNS)60名、韓国人日本語学習
者84名(K-N1:47名・K-N2:24名・K-N3:13名)である。調査方法はオンライン
アンケートのソフトウェアの「SurveyMonkey」とグーグルフォームを用い、指
定した動詞の過去形(「-ess-ta」「-タ」)と結果状態形(「-e iss-ta」「-テイル」)のうち、
指定された場面にふさわしい形式を選択してもらった。韓国語母語話者には、
調査文の韓国語版を、韓国人日本語学習者には、場面説明を韓国語で提示し
た^[註3]。調査場面は、李(2017)に基づき「A.話し手の認識と外部世界とのずれ
が感じにくい6場面(①発話時に初めて見た眼前の結果状態3場面+②対話の場で初めて
気づいた結果状態3場面)」と「B.話し手の認識と外部世界とのずれが感じやすい6
場面(③話し手の認識と違った眼前の結果状態3場面+④話し手の認識と違った聞き手の認
識3場面)」で、計12問を設けた。調査場面はランダムで提示された。

3.2 調査場面と結果の予測

3.2.1 A. 話し手の認識と外部世界とのずれが感じにくい場面

3.2.1.1 ①発話時に初めて見た眼前の結果状態

場面 [1] (靴下を履いたら、穴から親指が…)

→あなた:「穴 _____【あく】」

場面 [2] (たまたま、友達の家を通ったら、ドアが全開に…)

→あなた:「ドアが _____【開く】」

場面 [3] (忘れ物に気づいたが、もうすぐ校門の閉まる時間でした。急いで学校に向かったが間に合いませんでした…)

→あなた:「 _____【閉まる】」

場面 [1] から場面 [3] は、話し手が発話時に眼前の結果状態を初めて見た場合である。発話時に初めて見た結果状態であるため、話し手が以前に持っている情報や知識 (= 認識) が前提になりにくい場面である。

3.2.1.2 ②話の場で初めて気づいた結果状態

場面 [4] (友達と食堂で、ご飯を食べている途中、ふと友達の間を見たら、頬にご飯粒がありました)

→あなた:「ねえ、ほっぺたにご飯粒 _____【付く】」

場面 [5] (友達と家に帰る途中、何気なく友達のリュックを見たらカバンがちゃんと閉まっていなくて、中身が落ちそうでした…)

→あなた:「ねえ、カバン _____【開く】」

場面 [6] (友達の靴を見たら、靴紐が…)

→あなた:「靴紐 _____【ほどける】」

場面 [4] から場面 [6] は、話し手は気づいていること (それぞれ、「聞き手の頬にご飯粒が付いていること」「聞き手のカバンが開いていること」「聞き手の靴紐がほどけ

ていること) に聞き手は気づいていない場面である。話し手はある事態に気づいているが、聞き手はその事態に気づいていないため、話し手の認識と聞き手の認識とのずれがある場面のように見るが、話し手にとっても対話の場で初めて気づいた (見た) 場面であり、話し手が対話場面の直前に持っていた認識が前提になりにくい、つまり、話し手の認識と聞き手の認識とのずれが感じにくい場面である。

場面 [1] から場面 [6] は、話し手の認識と眼前の結果状態、もしくは聞き手の認識とのずれが感じにくい場合、李 (2017) に従えば、韓国語では過去形がより自然な場面である。一方、日本語では、変化の瞬間あるいは変化の前後の状態を把握していないため、結果状態形が自然な場面である。よって、李 (2017) が正しければ、日本語母語話者は「-テイル」形を選択し、韓国語母語話者と韓国人日本語学習者は、それぞれ「-ess-ta」形・「-タ形」を選ぶ傾向があると予想される。

3.2.2 B. 話し手の認識と外部世界とのずれが感じやすい場面

3.2.2.1 ③話し手の認識と違った眼前の結果状態

場面 [7] (ネットで買った新品の服が届きました。さっそく着てみたら、袖に穴が…)

→あなた:「穴 _____【あく】」

場面 [8] (出かけるとき、家のドアの鍵をかけて出たが、帰ってきたら家のドアが…)

→あなた「ドアが _____【開く】」

場面 [9] (インターネットで営業時間を確認してから郵便局に行ったら「closed」の札が…)

→あなた「まだ、営業時間なのに _____【閉まる】」

場面 [7] から場面 [9] は、それぞれ「(常識的に) 新品の服の袖には穴があいていない」、「出かけるとき家のドアの鍵をかけたため、帰ってきて家のは閉まっている」「インターネットで調べたら営業中だった」という認識を持っている話し手が、「新品の服の袖に穴があいている」「帰ってきたら、家のドアが開いている」「郵便局に行ったら、閉まっている」眼前状態を見た場面

である。つまり、場面 [1] から [6] と同様に、発話時に初めて見た結果状態を述べる場面ではあるが、話し手が以前に持っていた情報や知識 (=認識) と眼前の結果状態とのずれが感じやすい場面である。

3.2.2.2 ④話し手の認識と違った聞き手の認識

場面 [10] (友達が汗をダラダラ流しながら教室に入ってきました。エアコンが28度に設定されているせいか、エアコンがついていないと勘違いしているようです…)

友達「暑いね。エアコンつけよう。」

→あなた「_____【つく】」

場面 [11] (辛いものが苦手な日本人の友達が初めて韓国に来て、飲み屋でチヂミを注文しようとしていました…)

→あなた「唐辛子が_____【入る】。大丈夫？」

場面 [12] (控え室の机を拭こうとし、雑巾を探している友達に…)

友達「あら、雑巾ってここじゃなかったっけ？」

→あなた「そこじゃなくて、あそこに_____【掛かる】」

場面 [10] から場面 [12] は、それぞれ話し手は「エアコンがついていること」「韓国のチヂミには唐辛子が入っているものもあり、辛いチヂミもあること」「あそこに雑巾が掛かっていること」を知っているが、聞き手は「エアコンがついていない」「日本のチヂミには唐辛子が入っていないため、チヂミは辛くない食べ物だ」「ここに雑巾が掛かっている」と思っている場面である。つまり、いずれも、話し手の認識と聞き手の認識とのずれが感じやすい場面である。

場面 [7] から [12] は、李 (2017) に従えば「話し手の認識と外部世界とのずれ」が感じやすい場面であり、韓国語では、このような場面に過去形も結果状態形も使用できる。一方、日本語では、場面 [1] から場面 [6] と同様に、変化の瞬間あるいは変化の前後の状態を把握していないため、結果状態形が自然な場面である。よって、李 (2017) が正しければ、日本語母語話者は「-テイル」形を選択し、韓国語母語話者と韓国人日本語学習者は、「A.話し手の認識

と外部世界とのずれが感じにくい場面 (3.2.1)」に比べ、それぞれ「-e iss-ta」形・「-テイル」形の選択が増加すると予想される。

4 調査の結果と考察

それぞれの場面における調査参加者の選択結果は次の通りである。

表1 日本語母語話者 (JNS) と韓国語母語話者 (KNS)、韓国人日本語学習者 (K-N1.2.3) の傾向

調査参加者		場面	A.話し手の認識と外部世界とのずれが感じにくい場面								総計
			①				②				
			[1]	[2]	[3]	計	[4]	[5]	[6]	計	
JNS 56名	「-タ」	6	1	1	8 (5%)	0	0	0	0 (0%)	8 (2%)	
	「-テイル」	50	55	55	160 (95%)	56	56	56	168 (100%)	328 (98%)	
KNS 60名	「-ess-ta」	44	41	50	135 (75%)	51	51	54	156 (87%)	291 (81%)	
	「-e iss-ta」	16	19	10	45 (25%)	9	9	6	24 (13%)	69 (19%)	
K-N1 47名	「-タ」	17	5	19	41 (29%)	10	21	6	37 (26%)	78 (28%)	
	「-テイル」	30	42	28	100 (71%)	37	26	41	104 (74%)	204 (72%)	
K-K2 24名	「-タ」	11	8	21	40 (56%)	4	6	2	13 (18%)	53 (37%)	
	「-テイル」	13	16	3	32 (44%)	20	18	21	59 (82%)	91 (63%)	
K-N3 13名	「-タ」	7	6	12	25 (64%)	5	6	3	14 (36%)	39 (50%)	
	「-テイル」	6	7	1	14 (36%)	8	7	10	25 (64%)	39 (50%)	
調査参加者		場面	B.話し手の認識と外部世界とのずれが感じやすい場面								総計
			③				④				
			[7]	[8]	[9]	計	[10]	[11]	[12]	計	
JNS 56名	「-タ」	2	1	1	4 (2%)	0	0	0	0 (0%)	4 (1%)	
	「-テイル」	54	55	55	164 (98%)	56	56	56	168 (100%)	332 (99%)	
KNS 60名	「-ess-ta」	24	11	21	56 (31%)	9	8	5	22 (12%)	78 (22%)	
	「-e iss-ta」	36	49	39	124 (69%)	51	52	55	158 (88%)	282 (78%)	
K-N1 47名	「-タ」	8	3	8	19 (13%)	4	4	2	10 (7%)	29 (10%)	
	「-テイル」	39	44	39	122 (87%)	43	43	45	131 (93%)	253 (90%)	
K-K2 24名	「-タ」	3	3	11	17 (24%)	8	5	5	18 (25%)	35 (24%)	
	「-テイル」	21	21	13	55 (76%)	16	19	19	54 (75%)	109 (76%)	
K-N3 13名	「-タ」	4	4	5	13 (33%)	6	4	5	15 (38%)	28 (36%)	
	「-テイル」	9	9	8	26 (67%)	7	9	8	24 (62%)	50 (64%)	

4.1 日韓両言語の母語話者と韓国人日本語学習者の選択傾向の違い

日本語母語話者 (JNS) は、Aの場面で8名 (総計2%) とBの場面で4名 (総計1%) が「-タ」形を選択しているが^[註4]、全体的には、予測通り「-テイル」形を選択する傾向が顕著に見られた。「A. 話し手の認識と外部世界とのずれが感じにくい場面 (以下、Aの場面): タ形8回、テイル形328回」「B. 話し手の認識と外部世界とのずれが感じやすい場面 (以下、Bの場面): タ形4回、テイル形332回」で直接確率計算 (Fisher's exact test) を行った^[註5] 結果、その偶然確率は $p=0.192$ (片側検定) であり、有意でなかった。したがって、日本語母語話者は「Bの場面」の方が「Aの場面」より、「-テイル」形の選択が多いとは言えない。つまり、「話し手の認識と外部世界 (眼前状態あるいは聞き手の認識) とのずれの有無」により、「-タ」形と「-テイル」形の選択を変えることはないと考えられる。

一方、韓国語母語話者 (KNS) は、予測通りBの場面 (282 (78%)) の方がAの場面 (69 (19%)) より「-テイル」形の選択が増加している。「Aの場面: タ形291回、テイル形69回」「Bの場面: タ形78回、テイル形282回」で直接確率計算を行った結果、その偶然確率は $p=0.000$ (片側検定) であり、有意だった。「Bの場面」の「Aの場面」に対するオッズ比^[註6] は15.25であり、95%信頼区間 (片側)^[註7] は11.24 ~ ∞ と推定された。したがって、韓国語母語話者は結果状態を言う際に、「Bの場面」の方が「Aの場面」より、結果状態形「-e iss-ta」の選択が増えていると考えられる。つまり、韓国語母語話者は結果状態を言う際に「話し手の認識と外部世界とのずれの有無」により、過去形「-ess-ta」と結果状態形「-e iss-ta」の選択を変えるといた李 (2017) を支持する結果である。具体的には、韓国語母語話者は、「話し手の認識と外部世界とのずれが感じにくい場面」では過去形「-ess-ta」を選択しやすくなり、「話し手の認識と外部世界とのずれが感じやすい場合」では結果状態形「-e iss-ta」を選択しやすくなる傾向があると考えられる。

韓国人日本語学習者 (K-N1・N2・N3) は、レベルによって多少傾向の違いはあるが、全体的に予測通りBの場面 (412 (82%)) の方がAの場面 (334 (66%)) より「-テイル」形の選択が増加している^[註8]。「Aの場面: タ形170回、テイル形334回」「Bの場面: タ形92回、テイル形412回」で直接確率計算を行った結果、

その偶然確率は $p=0.000$ (片側検定) であり、有意だった。「Bの場面」の「Aの場面」に対するオッズ比は2.28であり、95%信頼区間 (片側) は1.78 ~ ∞ と推定された。したがって、韓国人日本語学習者は、結果状態を言う際に、「Bの場面」の方が「Aの場面」より、結果状態形「-テイル」の選択が増えていると考えられる。つまり、韓国人日本語学習者の傾向は、結果状態形の選択比率には多少差があるものの、韓国語母語話者と同様な傾向であることがわかる。このことから、韓国人日本語学習者は、結果状態を言う際に韓国語の結果状態形の使用基準をそのまま日本語に当てはめている可能性があると考えられる。具体的には、韓国人日本語学習者は、ある結果状態を初めて見たり、ある結果状態を見て変化が起こったことに気づいた文脈では相対的に「-タ」形を選択しやすくなり、話し手が発話時以前に持っていた情報や知識と違った結果状態を見たり、話し手の認識と聞き手の認識のずれがある文脈では相対的に「-テイル」形を選択しやすくなると考えられる。

4.2 韓国人日本語学習者はどのような結果状態場面に誤用が生じやすいのか

N1レベルの韓国人日本語学習者 (K-N1) の各場面における「-テイル」形の選択率は、④の場面が93%で最も高く、③の場面が87%、②の場面が74%、①の場面が71%の順となっている。「-テイル」形の選択率が、Bの場面 (③、④) では約90%になっているが、Aの場面 (①、②) では約70%になっている。これらのことから、N1レベルの韓国人日本語学習者は、比較的Aの場面で誤用が生じやすいと考えられる。

N2レベルの韓国人日本語学習者 (K-N2) の各場面における「-テイル」形の選択率は、②の場面が82%で最も高く、続いて③の場面が76%、④の場面が75%である。①の場面が44%となっており、他の場面と比べ顕著に低い。「-テイル」形の選択率が、②・③・④の場面では約80%であるが、①の場面では約40%となっていることから、N2レベルの韓国人日本語学習者にとっては、特に「①発話時に初めて見た眼前の結果状態」を言う際に誤用が生じやすいと考えられる。

N3レベルの韓国人日本語学習者 (K-N3) の各場面における「-テイル」形の選択率は、③の場面が67%、②の場面が64%、④の場面が62%でほぼ同率で

ある。続いて①の場面が36%となっており、他の場面と比べ顕著に低い。「-テイル」形の選択率が、全体的に60%台と低いことから、N3レベルの韓国人日本語学習者は、すべての結果状態を言う場面において誤用が生じやすいと考えられる。

N2とN3レベルの韓国人日本語学習者では、Aの場面における「-テイル」形の選択率が①の場面にそれぞれ44%・36%、②の場面にそれぞれ82%・64%となっており、発話時に初めて気づいた眼前の結果状態を言う場合において①独話か②対話かの違いが「-テイル」形の選択に影響しているように見られる。この現象は「話し手の認識と外部世界とのずれの有無」という観点から見ると、話し手と聞き手の「情報の差 (=認識のずれ)」による情報伝達が目的になる②対話の方が、①独話より「話し手の認識と外部世界 (=聞き手の認識) とのずれ」が想定しやすいため、生じた結果であると考えられることができる。

5 まとめと教育的示唆

本稿では、母語の影響という観点から日本語と韓国語の結果状態形の使用基準の違いに注目し、(i) 両言語の母語話者と韓国人日本語学習者の「-テイル」形の選択傾向の違いと、(ii) 韓国人日本語学習者はどのような結果状態場面に誤用が生じやすいのかについて考察を行った。その結果、(i) については、日本語母語話者は「話し手の認識と外部世界とのずれの感じやすさ」の違いにより、「-タ」形と「-テイル」形の選択を変えることはなかったが、韓国語母語話者と韓国人日本語学習者は、結果状態を言う際に「話し手の認識と外部世界とのずれの感じやすさ」の違いにより、それぞれ「-ess-ta」形と「-e-iss-ta」形・「-タ」形と「-テイル」形の選択を変えることがわかった。このことから、韓国人日本語学習者は、結果状態を言う際に韓国語の結果状態形の使用基準をそのまま日本語に当てはめている可能性があると考えられることができる。(ii) については、韓国人日本語学習者は、全体的に「発話時に初めて見た結果状態を言う場面」に「-タ」形の選択が最も多かった。結果状態を表す「-テイル」が初級レベルで入されることを考えれば、N1・N2レベルになっても約10～30%が「-タ」形を選択していることと、N3レベルは正解率 (=「-テイル」形の選択率)

が60%台と非常に低いことから、結果状態を表す「-テイル」は、韓国人学習者にとって習得が難しい項目であると考えられる。

韓国における日本語教育の現場では、日本語の結果状態を表す「-テイル」形は韓国語の「-e-iss-ta」形に該当するという説明に現れているように、韓国語と日本語の類似点に注目して日本語教育が行われている。そのため、結果状態を言う場面において、日本語の過去形はその変化を直接目撃している場合に限って使用できるという説明だけだと、実際(2)のように韓国語の過去形も変化を直接目撃している場合に使用できることもあり、「-タ」形 = 「-ess-ta」形と拡大解釈する恐れがある。韓国人日本語学習者は、結果状態を言う際に韓国語の結果状態形の使用基準をそのまま日本語に当てはめている可能性があるという今回の調査結果から考えると、韓国語の感覚に合わせ、発話の場面において結果状態を初めて見た場合(韓国語では過去形がより自然)と、自分または聞き手が持っている情報・知識が事実と違うことを言う場合(韓国語では過去形も結果状態形も自然)にテイル形を使用するというを明示的に指導する必要があると考えられる。

〈広島大学〉

注

- [注1] …… 中国人日本語学習者においても(1)のようにある結果状態に気づいたとき「-タ」形を使用する誤用が見られるとされている(庵2017)。このような誤用は、韓国語と中国語では、結果場面を言うとき、「-タ」形に対応すると考えられる韓国語の「-ess-ta」と中国語の「了」が基本的に使用され、「-テイル」形に対応すると考えられる韓国語の「-e-iss-ta」と中国語の「着」はある特定の条件があるとき(韓国語:「認識のずれの有無」(李2017)・中国語:「変化への確信度の高さ」(陳2009))しか使用できないといった、韓国語と中国語の結果状態形の使用基準の共通点に起因すると考えられる。しかし、韓国語と中国語の結果状態形の使用基準には相違点もあるため、韓国人日本語学習者と中国人日本語学習者の誤用が生じやすい場面は異なると予想される。本稿では韓国人日本語学習者を対象とするため、中国人日本語学習者との違いについては別の機会に譲りたい。
- [注2] …… (3)(4)においても、話し手が、それぞれ「穴が開いていないだろう」「聞き手が知らない情報を伝える」といった「話し手の認識と外部世界とのずれ」を発話の前提とする場合は「-e-iss-ta」形が使用できる。李(2017)は(3)(4)

は、(3') (4') に比べ、相対的に「話し手の認識と外部世界とのずれ」が感じにくい例として取り上げていると思われる。

[注3] …… 日本語母語話者用の URL = <https://ko.surveymonkey.com/r/3BVK2L5>
 韓国人日本語学習者用の URL = <https://ko.surveymonkey.com/r/3VYYC35>
 韓国語母語話者用の URL = <https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSedQywdWW3D32zcNc0z3DNbB9-mcU1Uspm1JaOk8UcOMJLg2g/viewform?vc=0&c=0&w=1>
 調査期間：日本語母語話者と韓国人日本語学習者 = 2017年7月～9月初旬。
 韓国語母語話者 = 2019年1月9日～1月15日。

[注4] …… 日本語母語話者は、場面1で6名、場面2で1名、場面3で1名がタ形を選択している。場面1・2・3を、それぞれ「靴下を履いたとき、親指が靴下を破り出てきた」「見た瞬間、ドアが開いた」「学校に着いたとき、ちょうど校門が閉まった」と捉えた可能性がある。また、場面7で2名、場面8で1名、場面9で1名がタ形を選択している。場面7・8・9を、それぞれ「新品の服である」「自分がドアを閉めた」「営業時間を確認した」ため自分の経験から結果状態を言う場面であることから、変化の瞬間は見えていないが、それに準ずる情報量を持っている場合と解釈し、「-タ」形を選択していると思われる。

[注5] …… 調査項目数が2項目で、選択肢が2択ある、2×2の度数の検定には、カイ二乗検定と直接確率計算 (Fisher's exact test) がある。カイ二乗検定の偶然確率 p は近似であるが、直接確率計算の偶然確率 p は正確であること、特に、小度数がある場合にカイ二乗検定の近似が悪くなること (中野・田中2012: 83) などの理由で、本稿では直接確率計算で検定を行った。偶然確率 p は、小さければ小さいほど有意性が高いことを示す (中野・田中2012: 66)。検定には、「js-STAR version 8.1.1j」というオンライン上のプログラムの2×2表における直接確率計算 (Fisher's exact test) を利用した。有意水準は5%とした。つまり、偶然確率 p が0.05より小さければ有意差があると解釈できる。

[注6] …… オッズ比 (Odds ratio) とは、ある事柄の起きやすさを2つの群で比較して示す数値である。2つの群に差がないとしたらオッズ比は1になる。オッズ比が1より大きい数値であれば、要因に対してある事柄が起こる可能性が高まると解釈できる。このケースでは、韓国語母語話者の場合、「Aの場面」に関しては「結果状態形」対「過去形」の比率である69/291がオッズになり、「Bの場面」に関しては「結果状態形」対「過去形」の比率である282/78がオッズになる。これらのオッズに関して、「Bの場面」の「Aの場面」に対するオッズ比は、 $282/78 \div 69/291$ であり、15.25になる。オッズ比が1より大きければ、結果状態形の選択しやすさが「Bの場面」でより高いと解釈している。ただし、オッズ比は頻度差がどれほど大きいのかを表すものに過ぎないので、「Bの場面」は、「Aの場面」に比べ、結果状態形の選択が15.25倍高くなることを意味するわけではない。単に、「Bの場面」の方が「Aの場面」より、結果状態形の選択しやすさ (=オッズ) が15.25倍高かったと解釈できる。

[注7] …… オッズ比の区間推定 (95%信頼区間) は差の大きさを評価するものである。

下限値の大きさがオッズ比=1からの距離を示す。下限値があまりにオッズ比=1に近いなら、有意性が得られても、それほど大きな差ではないと解釈される。このケースでは、韓国語母語話者 (下限値11.24) の方が韓国人日本語学習者 (下限値1.78) より、「認識のずれの有無」による効果が大きいと解釈できる。

[注8] …… 次の表は、各レベル別に「Aの場面：タ形の選択回数、テイル形の選択回数」「Bの場面：タ形の選択回数、テイル形の選択回数」で直接確率計算を行った結果をまとめたものである。

	偶然確率 (片側検定)	オッズ比 (BのA)	95%信頼区間 (片側)
K-N1	$p=0.000$ (有意)	3.34	2.26 ~ ∞
K-N2	$p=0.015$ (有意)	1.81	1.18 ~ ∞
K-N3	$p=0.053$ (有意傾向)	1.79	1.04 ~ ∞

参考文献

- 庵功雄 (2017) 『一步進んだ日本語文法の教え方 1』くろしお出版
- 李在鉉 (2017) 「結果状態における日本語と韓国語の結果状態形の使用基準の違い」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 文化教育開発関連領域』66, pp.185-194. 広島大学大学院教育学研究科
- 井上優・生越直樹・木村英樹 (2002) 「テンス・アスペクトの比較対照—日本語・朝鮮語・中国語」生越直樹 (編) 『シリーズ言語科学4 対照言語学』pp.125-160. 東京大学出版会
- 生越直樹 (1997) 「朝鮮語と日本語の過去形の使い方—結果状態形との関連を中心にして」国立国語研究所 (編) 『日本語と外国語の対照研究IV 日本語と朝鮮語下巻 研究論文編』pp.79-89. くろしお出版
- 小野里恵・イジョンスク (2008) 「日本語のテンス・アスペクト表現における韓国人日本語学習者の誤用分析」『日語日文学』40, pp.91-107. 大韓日語日文学会
- 孫東周 (2012) 「韓国人学習者の結果状態に関する誤用要因分析」『日語日文学』55, pp.79-89. 大韓日語日文学会
- 陳昭心 (2009) 「中国語を母語とする日本語学習者にとって「変化」とは何か—「消える」「閉まる」の使用文脈を手掛かりに」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 文化教育開発関連領域』58, pp.227-234. 広島大学大学院教育学研究科
- 中野博幸・田中敏 (2012) 『フリーソフト js-STAR でかんたん統計データ分析』技術評論社

